

平成 30 年度評議員会（研究に関するコメント、指摘事項および回答）

試験研究名	政策課題1 琵琶湖沿岸域における湖底環境・生物再生に向けた研究
-------	---------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

住民というよりも、環境に関心のある「市民」ではないだろうか。この研究で重要なことは、浜に隣接する地域に居住する人たちの存在である。隣接する住民との協働をどのように進めていくのか、そのあたりについても、検討していただきたい。

【回答1】

湖辺環境修復活動には隣接する住民の方々にもご参加いただいておりますが、活動の立ち上げにあたり、もとより環境意識の高い方々が集まってくださったものと認識しております。より多くの住民との協働を図るため、まずは私たちの取り組みをより多くの方々を知っていただき、興味を持っていただくことが重要と考え、本年8月には本活動にかかる体験イベントを開催しました。また、活動当初から、持続的な活動には参加者の意識醸成が不可欠と考え、活動場所における調査結果の共有、琵琶湖の環境にかかる情報提供に努めております。アンケート調査の結果からも、参加者の理解と知識が深まるとともに、本活動の効果への期待が高まったことが分かりました。引き続き、住民との協働のあり方について検討してまいります。

【コメント2】

多角的な調査研究がなされている水草の空間分布と底生生物の生息密度との関係性はどうなっているか。

【回答2】

2011～2017年の夏季の南湖調査（湖辺より沖の9定点）結果から、水草繁茂量が大きい場所ほど、底生動物で優占したミミズ類の生息密度は有意に少なくなる関係が認められました。一方、ミミズ類の次に生息数が多かったユスリカ類につきましては、水草繁茂量との関係性が認められず、底質中に生息する種と水草付着性の種が混獲されたことによるものと考えております。

シジミ類は、湖辺を除けば南湖全体で生息密度が低かったのですが、年別の合計値で見ると、水草繁茂量が少ない年にシジミ類が多い傾向がみられます。北湖の水草については、今後の研究課題として検討いたします。

【コメント3】

沿岸帯の影響から沖帯を含めた解析評価が必要であり、沖帯の粒子の構成がどのような流域を含めた由来から成り立っているのか、湖内部での生産による有機物生産と分解とどう関係しているのかを含めてまとめることが望ましい。マニュアルでは単に沿岸構造をどのように変えればよいかという狭い範囲でまとめないようにしてほしい。帰帆島水路への対応も考えてほしい。

【回答3】

沿岸帯から沖帯まで、流域の影響も含めた俯瞰的な研究は、当センター全体の大きなテーマの1つとして、政策課題研究1～3を中心に分担して取り組んでいるところです。本研究では、植物プランクトンを含む懸濁物質について、湖水の流動・波浪と関連させ、沿岸帯と沖帯との移動を考慮するだけでなく、他の研究と情報共有しつつ、マニュアル内容を検討してまいります。

矢橋帰帆島水路の課題（オオバナミズキンバイ・ヒシ等の繁茂、水質汚濁等）は県行政部局も認識しており、環境改善に向けた検討会議を設置して議論が進められているところです。

試験研究名	政策課題2 在来魚の保全に向けた水系のつながり再生に関する研究
-------	---------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

これまで、住民・市民によるアユ、ビワマス復活の試みがなされてきている。新たに愛知川流域での住民連携の取組に対して、これまでの経緯、現場サンプルを検証することが重要。

【回答1】

滋賀県内では、特に米原など近隣の市町村においてビワマス復活の試みが地域の人々の協力のもと行われており参考になります。そのため、東近江市の愛知川におけるアユ、ビワマスのにぎわいを再生する住民連携の取り組みにおいても、これまでの取り組み事例を検証しながら、他所の事例を知った上で、政策課題2の研究成果を利用して、愛知川のアユやビワマスが再生するための新たな方策を地域の皆様と検討していきたいと考えております。

【コメント2】

森-川-湖の水系のつながりを再生する上で、どのような視点が重要なのか、注目する要素、メカニズムを整理したうえでそれぞれの調査項目間の関係、また、政策課題1との関係がわかるとよい。森と川との関係において、なぜシカ柵の有無が重要なのか、湖内魚類との関係を改善することも含め、検討する必要がある。

全体としては、現場でのデータを積み上げ、検証的な調査として評価できる。

【回答2】

「森-川-湖の水系のつながりを再生する上で、どのような視点が重要なのか、注目する要素、メカニズムを整理」というのは大変重要なことだと思います。ところが、実際に現場に出てみると「注目すべき要素」の数は多く、特に土砂の流出移動に関しては「メカニズム」が不明なことが多いという状況でした。そのため、政策課題2ではコメントいただいた「注目すべき要素」と「メカニズムの整理」をクリアにすることを研究の第1目標としております。コメントいただいたシカ柵の効果の視点で考えると、「シカ柵により食害を防ぐことで森林の下層植生が安定し、森林表層土壌からの河川への泥質流出割合が減少し、河川のアユの産卵環境が良くなり、川で生まれたアユが湖に戻り湖内魚類が増える。」といった因果連鎖で関係改善が生じると想定しています。しかし、この連鎖は科学的に解明できていない部分も多いため、実証的に研究を続けていく予定です。

試験研究名	政策課題3 生態系保全につながる物質循環のあり方に関する研究
-------	--------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答	
<p>【コメント1】 政策課題研究1～3の在来魚介類のにぎわい復活に向けた研究の中で、それぞれの研究の連携が十分に取れていないように見える。全体を通じる研究目的がどれだけ達成されているのかを適宜見直す機会を設けることによって改善されてはどうか。</p> <p>【回答1】 在来魚介類のにぎわい復活に向けた研究については、琵琶湖環境研究推進機構の枠組みの中で関係部局、各試験研究機関が緊密に連携を図っています。また、センター内では東専門研究員が各研究を統括し、連携して取り組むように努めております。研究の達成状況につきましては、琵琶湖環境研究推進機構の各会議で研究成果を報告し、適宜見直しを行っています。今後も引き続き研究間の連携をはかり、研究目的の達成に向けて取り組んでまいります。</p> <p>【コメント2】 「過不足ない」「滞りない」「偏りがない」ということはよくわかった。おそらく次のステップであると思うが、「そのために何が必要か」を明らかにしてほしい。</p> <p>【回答2】 ご指摘の通り、「過不足ない」「滞りない」「偏りがない」物質循環の要件やそれに向けた施策の展開などについては、今後の研究の中で検討したいと考えております。現在、生食食物連鎖および微生物食物連鎖について、その現状や要因について調査する研究を行っているところですので、「過不足ない」「滞りない」「偏りがない」状況に影響を与える因子が今後見えてくる可能性はあると考えております。</p> <p>【コメント3】 有機物フローの中に水草の存在も入れてはどうか。季節変動やエリアの偏りがあるとは思いますが、検討してほしい。</p> <p>【回答3】 「琵琶湖流域水物質循環モデル」に関してはすでに水草消長モデルが組み込まれています。また別途、同様の構造を持つ水草消長モデルを政策課題6の中で構築・検討しており、そちらとも連携しながら、水草が物質循環に与える影響について検討していきたいと考えております。</p>	

試験研究名	政策課題4 生物多様性保全・再生の戦略的推進に向けた研究
-------	------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

戦略的推進をテーマとしているが、これにアプローチしているようには見えない。個々の研究がどうつながって戦略を組み立てていくのか検討すべき。

【回答1】

本研究プロジェクトでは「生物多様性しが戦略」を推進する上で、政策の実効性の向上に資すること、新たな課題問題に即した部分、かつ、必要性、緊急性の高い部分をサブテーマに選択し、研究に取り組んでいるところです。生物多様性の問題、課題も多様であります。いずれも、「生物多様性しが戦略」の目標につながるよう努力していきます。

【コメント2】

「戦略的推進」をめざす観点でみるとサブテーマ2で実施している3つの研究成果が戦略的推進にどのように生かされるのかが示されていない。サブテーマ1でも、2つの検討がなされているが、これらからどのように社会経済活動における推進へとつなげるのかがみえない。「地球の環境ものさし」を指標として選んだ理由を示す必要はないか。

全体的にみて、この課題の中の研究活動がばらばらで、最終目的にどのように成果を収結しアウトカムにつなげるかを説明するようにしないと、せっかくの個々の研究成果がこの課題へどのように生かされるのかをアピールできないと思われる。

【回答2】

「民」である企業における生物多様性保全を「公」である滋賀県がどのように導くのか今後も検討していきます。「環境ものさし」は住民主体の環境保全活動を持続的に行っていくうえで有効であると考えております。

第5期中期計画では「生物多様性しが戦略」を推進するための課題に即して、必要性、緊急性の高い部分を研究に取り組んでいます。個々の研究テーマはそれぞれの課題に対して政策提言を行います。全体としての目標達成は「生物多様性しが戦略」の推進の中で評価されるようにつながっていきます。

【コメント3】

“滋賀の生物多様性”が市民、住民に具体的にイメージ化し伝わるようお願いしたい。

データバンクは必須、これまでなかったことが不思議なくらい。

データ集積にあたっては、かつての原風景を知る人への聞きとりも大きなヒントになると考える。

【回答3】

「生物多様性保全」は、何を狙っているのかわかりにくいというご意見をしばしばいただきます。滋賀県の身近な自然をみんなで見守っていきましょうというメッセージを上手く伝えられるように今後も検討していきます。

また、様々なタイプの調査データがあってよいと思いますので、どのように集積できるか検討課題とさせていただきます。

試験研究名	政策課題5 琵琶湖を育む森林の管理に関する研究
-------	-------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

シカが増える前の森林と、シカが食べない植物による森林とで、涵養林としての状態と栄養塩保持状態に差があるのか無いのか、あった場合は、その差は琵琶湖の水環境を保全する上で許容範囲なのかそうでないのかの検討を、平行して行うべきだと思われる。もし許容範囲でなかった場合、緑は保全されたが水質は悪化し続けるという最悪な結果になる。それならば、シカをもっと間引いて、得られたシカをジビエとして販売する体制を確立する方が有効と思われる。

【回答1】

当センターでは、過去に、皆伐した森林において、①再生してくる植生を恒常的に除去、②植生の再生を促進、③斜面下部の木本を残存（それ以外は植生を除去）と伐採後の植生状況が異なる場合の土壌硝酸態窒素濃度の推移について調査を行い、③では窒素流出の抑制効果はあるものの、草本植生が主である②では夏場の窒素流出を秋に遅延させる効果のみであることを明らかにしています。本調査を行った当時の植生は、シカ不嗜好性植物が優占していたわけではありませんが、窒素の流出を抑制するには、斜面に下部域における木本の存在が重要であることが示唆されています。木本を更新させるには土壌は不可欠ですので、研究ではその土壌の流亡の抑制と伐採後の森林（木本）の更新を目的として取り組んでいるところです。

なお、シカの捕獲や資源利用については行政部局が主体となって取り組んでいるところです。

【コメント2】

多面的機能を持続的に発揮する森林管理を目指すということであるので、一つの技術、一つの機能に特化した調査に限定するのではなく、どの場でどのような場面かを想定しながら提案することが重要と思われる。既存の知見や取り組みを踏まえながら地域の自然や文化に適合した方法論を検討する中で得られたデータを活かしてほしい。

【回答2】

今後は、文献調査も行いながら森林更新手法に関する情報収集と整理を行う予定ですが、ご指摘いただいたように想定している状況なども整理しながら森林管理手法を提案していくように努めて参ります。

【コメント3】

「政策課題2」とこの研究との接点がよくみえない。

森学や林学が持つ価値前提を越えて、河川との関係、河川の生物多様性との関係について視野を拡大していくべきではないか。

【回答3】

政策課題2では、森林からの土砂供給やその土砂の移動にも着目しながら、在来魚の保全にむけた水系のつながり再生のための研究を分担し、政策課題5では適切な土砂供給に資するための森林管理の技術研究を分担していると認識しています。

また、森林と河川、河川の生物多様性との関係についての研究は、森一川一湖（海）と生

態系が繋がっていることを考えると大変意義深いと思いますが、京都大学芦生演習林でのプロジェクトのように、特定の水系をフィールドに大勢の研究者や市民研究者が役割分担をもって関わり、長期的なモニタリングを行いながら、少しずつそのメカニズムが解き明かされていくものだと考えます。

試験研究名	政策課題6 水草管理による生態系再生に向けた研究
-------	--------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

モデルにおいては刈り取り時期の違いによる水草量の増減をシミュレーションできるようにしてもらいたい。

【回答1】

現在のモデルでは、水草刈り取りの努力量を刈り取りが行われる期間で一定と設定しております。今後は、刈り取り時期や努力量を変えてシミュレーションできないか検討します。

【コメント2】

本研究の最終年度の結果により、いつ、どれくらいの量を刈り取れば良いかが明らかになったとして、その実施は難しいと考えられる。なぜなら、地下茎で越冬するタイプの水草の地下茎の除去はいわゆる「根こそぎ」で除去できないからである。このため、穴道湖では地下茎で越冬するオオササエビモを対象に、4月の発芽前にジェット噴流で除去する試験を実施している。水草は南湖程度の広さであれば初期投資400～600万円、年間維持費100～200万円で管理できると考えているが、糸状藻類は対策が思いつかない。少なくともバイカル湖と五大湖では糸状藻類の異常繁茂の主要因はリンの増加で、琵琶湖でなぜLyngbyaなのか、バイカル湖や五大湖のような大型動物の大量死をもたらさないのか、注視する必要があると思われる。

【回答2】

現在実施中の最新の知見をコメントいただき、ありがとうございます。他の湖沼の情報や効果的な手法についても、今後引き続き情報収集を進めていきます。

糸状藻類については、少なくともその表面においてはミズムシ、ヨコエビなどの底生動物が数多く生息している一方で、泥内に生息するミミズやユスリカが少ない傾向が見られます。引き続き、湖底での現状把握や生育している糸状藻類の特性の把握を進めていきます。

【コメント3】

琵琶湖の底質、水質のモニタリング方法の標準化を琵琶湖の長期的対応を考えるベースとして考えてほしい。水草成長モデルに底質栄養塩の還元と吸収が入ると思うが、底質の栄養塩収支をモデル化しなくてよいのか。

【回答3】

ご指摘いただいたモニタリング手法の標準化ですが、環境省によって「底質調査方法」が示されており、平成24年に最新の知見を踏まえて改訂が行われております。本研究でも、標準化された手法として、「底質調査法」に則って研究を進めております。

現在の水草消長モデルでは、底質からの栄養塩吸収についてはモデル化しておりますが、例えば底質中の栄養塩濃度によって成長量が変わるといった部分については知見が少なく、モデル化ができておりません。今後の研究で得られるデータや既往文献の情報などを考慮して、底質との関わりのモデル化についても検討していきたいと考えております。

試験研究名	政策課題7 豊かさを実感できる持続可能な滋賀の将来像とその社会実装支援に関する研究
-------	---

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

「豊かさ」は環境だけでなく、トータルなものであり、新しい価値観の創造、共有も必要ではないか。

【回答1】

滋賀県基本構想（H27年度～H30年度）では「新しい豊かさ」として、「自分」の豊かさだけでなく、「今」の豊かさだけでなく、「もの」の豊かさだけでもない、みんなが将来も持続的に実感できる「心」の豊かさであり、それぞれの豊かさが互いにつながり、調和していくものとしております。本研究においても環境面のみならず、福祉や教育、働き方も含めて、多様な視点からの検討を行っています。しかし、まだ検討を始めて間もないこともあり、「豊かさ」に関する新たな価値観の創造まではたどり着けていない現状です。これらは今後の課題としながら、継続的に広い視点から市民参加で豊かさについて議論できる場を設けていきたいと考えております。

【コメント2】

実装化していくための具体的な方法についても検討してほしい。

実装化については、「理念」だけでなく、自分たちの暮らしの「豊かさ」につながることを実感できるような、広い意味（経済的なものだけでなく）での「インセンティブ」が必要と思われる。

【回答2】

将来社会像の実現のための取組が、市民主体で実行されるためには、ご指摘の通り「インセンティブ」が得られる仕掛けが求められると考えられます。ただ、これらの「インセンティブ」を享受するための有効な仕組みは、取組個々に異なることが考えられます。まずは、目指す将来社会像から、市民が主体となって実行可能な取組について検討した後に、どのような仕掛けを構築することで具体的な活動へとつながるのかについて来期以降で研究に取り組みたいと考えております。

【コメント3】

東近江市に続き、高島市で持続可能社会ビジョンづくりに取り組んでいるようだが、この2市のケースから県施策にそのまま活かす事は困難だと思われる。

13市6町各々が社会ビジョンづくりに向かえるよう県が強力に（予算化も含め）意識することが重要。

【回答3】

本年度行っている県の第五次環境総合計画の見直し作業において、東近江市や高島市のビジョンづくりの過程で開発した「将来ビジョン作成ツール」を活用しており、東近江市での具体的な取り組みを県内の先進事例として取り上げるなど、県の施策に一部反映されています。

各市レベルでさらに具現化することについては、将来ビジョン実現の進捗管理のための手法などと合わせて今後提案していきたいと考えております。

試験研究名	地方創生共同研究 琵琶湖の生態系評価とその再生に関する研究
-------	-------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

溶存酸素の急激な変動がどういう要因で生じているのか説明ではよくわからなかった。湖底のDO低下だけで説明できるか疑問がある。粒子の浮上巻き上げ等が関係していないのか。堰操作の実態と合わせて、どの程度、推定値と実測値が乖離しているのか点検してほしい。

【回答1】

観測データを得られたばかりであり、溶存酸素の急激な変動がどのような要因で生じているのかについて、本研究を通して究明したいと考えております。ご指摘の要因についてもあわせて検討してまいります。

【コメント2】

構築しようとする「モデル」が何を計算するものなのか、モデルを構成するパラメータにはどのようなものがあるのかを示していただきたかった。そうでなければ、H30年度に行うとしている「パラメータの調整」「モデルの高度化」がどのような内容になるのかわからない。

【回答2】

発表時間が10分だけであったため、優先順位で考え、モデルの詳しい構成の紹介ができませんでした。次回にはモデル構成をお示しします。本モデルは、流体力学による流動系モデルと生態系モデルと統合した3次元数理モデルで、水平方向に500mメッシュで、鉛直方向に1m毎にメッシュを分けています。モデルでは南湖を含んでいますが、これまで実データを用いた検定を行っていませんでしたので、パラメータの調整を行っています。また、南湖の湖底溶存酸素の再現にはメッシュ構造の変更も視野にあり、モデルの高度化を検討します。

試験研究名	調査解析 1 水深別水質調査と新指標（底層 D0）のモニタリング・評価手法の構築
-------	--

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答	
<p>【コメント1】 底層D0モニタリングとともにSODさらに溶出の試験も考える段階ではないか。予算をしっかりとるべき。</p> <p>【回答1】 委員ご指摘のとおり、今後、底層付近で無酸素状態が生じ長期化するような場合は、鉄や全りんなどの溶出による水質への影響が懸念されます。 底泥からの溶出試験は第3期中期計画のときに実施しており、Mnは無酸素状態になる前から溶出し、Fe・TP・NH4-Nは無酸素状態になった後に溶出するとの結果を得ているところです。 予算については、最大限努力しましたが大幅な削減が見込まれる大変厳しい状況ではありますが、与えられた範囲で効果的な調査ができるよう努力してまいります。</p> <p>【コメント2】 スライド8のTCとSODとの相関を見ると10～20mmではrがマイナスになっている。これは10mmの深さには分解しやすい有機物がほとんど残っていないことを示している。一方でスライド4では大型緑藻類増加後にD0の急減が起こっている。植物プランクトン起源のデトリタスはマリンスノーのように水と近い比重で漂っている可能性があるため、D0消費は底質直上水で高い可能性がある。また、堆積物については堆積物のEhによってはFeやMnが酸素消費する可能性があり、実際5～10mmではMnとSODのrが最大である。そのメカニズムを解明するには、ガラス微小電極を使ってEhのマイクロプロファイルのデータが必要だと思われる。</p> <p>【回答2】 委員ご指摘のとおり、SODには生物学的SOD（微生物が有機物を分解する際の酸素消費）と化学的SOD（金属の酸化による酸素消費）があり、FeやMnについても底泥付近において酸化還元サイクルが存在し、それによって凝集されているものと考えられます。 ガラス微小電極を用いたEhの測定については、今後、検討していきたいと考えております。</p>	

試験研究名	調査解析2 琵琶湖・瀬田川プランクトン等のモニタリングと遷移の評価
-------	-----------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答
<p>【コメント1】 長期にわたるモニタリングの成果から、パターンの抽出やかび臭プランクトンの発生時期の整理など、重要な成果が出ていると思われる。今後は、たとえば「南湖で〇〇が△△したら瀬田川で××が発生する可能性が□□%ある。」のような予報が可能になると、モニタリングの維持への理解が進むのではないかとと思われる。</p> <p>【回答1】 研究結果の有用性を示すことで、モニタリング維持への理解が進むよう、努力するとともに、委員ご指摘のような予報の実現に向けて努力してまいりたいと考えております。</p> <p>【コメント2】 滋賀県に引っ越してきて感じたことであるが、水道水の臭いが他府県と比べてきつい。この研究が市民には一番関心のあるところかもしれない。プランクトン発生時期や量を予測できれば、早めの対策を取れるのではないか。</p> <p>【回答2】 現在はモニタリング結果の解析を行っているところです。今後の研究では予測の検討を行い、水道異臭味対策への貢献につなげていきたいと考えております。</p>

試験研究名	調査解析3 PM2.5等の大気汚染物質にかかる濃度変動の挙動把握
-------	----------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

地域差は風向によって説明できると思われるが、基本的に越境汚染であるため発生源からの経路も踏まえた地域差の説明にまで将来的には進んでほしい。

【回答1】

風向とともに粒子の成分測定結果を解析することにより、国外起源であるのか国内の影響も含まれているのかを推定することが可能になります。国内外の発生源から滋賀県への輸送経路が季節的に異なることが、県内に濃度の地域差が生じる一因であると考えており、今後は発生源からの経路を踏まえた説明をしていきたいと考えます。

【コメント2】

県行政として、このような調査を進めることの「意義」や「意味」がどこにあるのか。その点についてもあわせて情報を提供していただくとセンターの研究としてより評価が高まるのではないかとと思われる。

【回答2】

PM2.5高濃度の要因は、越境大気汚染に加え、自動車排ガスの影響、広域気象（海陸風、風の収束等）や局地気象、固定発生源の影響、野焼きの影響など様々であり、地域や季節によって異なります。これらの地点差要因を解析することで、発生源対策等の基礎データとして活用するとともに、よりわかりやすい情報提供により県民の安全・安心を確保することを目的にしています。このような調査解析の目的も含め、ていねいな説明に努めます。

【コメント3】

PM2.5の移流経路が解明されたことが、今後、県民の生活にどのように活かされていくのか。PM2.5やその他の大気汚染物質が琵琶湖の水や生態系、人体に与える影響についても予測できる範囲で明示してほしい。

調査データが県民にタイムリーに開示されると県民へのサービスとしても価値が高まる。

【回答3】

PM2.5高濃度の要因は、越境大気汚染に加え、自動車排ガスの影響、広域気象（海陸風、風の収束等）や局地気象、固定発生源の影響、野焼きの影響など様々であり、地域や季節によって異なります。これらの地点差要因を解析することで、発生源対策等の基礎データとして活用するとともに、よりわかりやすい情報提供により県民の安全・安心を確保することを目的にしています。このような調査解析の目的も含め、ていねいな説明に努めます。

滋賀県のPM2.5濃度等の大気環境データは、環境省大気汚染物質広域監視システムにより、速報値を公表していますが、よりよい県民への情報発信に努めていきます。

試験研究名	調査解析4 化学物質の影響把握と緊急事故対応のための基盤構築
-------	--------------------------------

平成29年度実績におけるコメント、指摘事項および回答

【コメント1】

県内事業所で利用している化学物質への緊急対応だけでなく、移動する化学物質への対応も視野に入れるべき。

【回答1】

流出リスクのある化学物質としては、輸送などで移動する化学物質についても着目できればと考えます。今期計画においては、情報公開に関する制度が充実しているPRTR情報を活用し対象物質を絞り込みましたが、より実際の使用実態を踏まえた想定は望ましいことから、本取組の広がりの中でご指摘の事項についても念頭に置いていきたいと考えております。

【コメント2】

PRTRの改定作業に合わせて分析方法、緊急事故対応を含めて、対象項目の見直しをすべきである。WETのF、B等での複合影響の優先度は高いとは思えない。

【回答2】

PRTR法の改正に関する情報の提供いただきまして、誠にありがとうございます。制度の見直しに関する情報にも注視しながら本取組を進めていきたいと考えております。

PRTRに基づく県内の公共用水域への排出物質の1位と2位をそれぞれ「ふっ化水素及びその水溶性塩」および「ほう素化合物」が占めており、それに基づいてF、Bを対象物質に選定しました。

今年度については、それらの物質と金属との複合影響について試験を行いたいと考えております。